



▲ 高際均特任教授

AI活用し葛尾村の魅力発信

自主学修プログラム「葛尾未来デザイン塾」

今も原発事故の帰還困難区域が残る葛尾村をフィールドに、AI(人工知能)を駆使する人材を育てようという授業が自主学修プログラム「葛尾未来デザイン塾」です。

同村と、同村にAIデータセンターを建設するORENDA WORLD(本社・東京)、福島大地域未来デザインセンターの3者が2024年に結んだ連携協定が背景。25年4月の開講以来、履修生14人が村を毎月訪れ、地域や住む人の魅力を探ってきました。

これまでに、ブランド羊を飼養する畜産会社「牛屋」や、バナメイエビの陸上養殖に取り組む誘致企業「HANERU葛尾」などに取材。その成果を9月30日、大阪・関西万博で「メタバース推進協議会」などと連携しAI技術を用いて発表する予定です。また、同塾のホームページを履修生がAIのみで制作する計画も進んでいます。

担当教員の一人、高際均・地域未来デザインセンター特任教授は「関係人口拡大など被災地の課題解決のため、学生に最新のAI技術を学んでもらい、後の起業や先進的な事業につながれば」と期待しています。



▲ 「牛屋」で取材する履修生ら

相双地域支援サテライトの活動

地域復興支援



▲ 学校関係者の共感を呼んだ森さんの講演

葛尾村でCSマイスター森さん講演

葛尾村の葛尾村民会館で7月30日、福島大学市民講座「CSマイスター講演会」を開催しました。文部科学省コミュニティスクール(CS)マイスターの森万喜子さんが「地域と教育～つながりの中で子どもを育む～」と題して話し、村内から小中学校教員や学校運営協議会委員など25人が参加しました。

森さんは、千葉県や北海道の中学校で長年美術教員を務め、定年退職するまで校長として果敢に学校改革を進めた経験を基に講演。価値観が多様化した現代社会では画一的な教育を避け、子どもが自らの関心のままに「選べる」環境を整えることが重要だとした上で、成功体験より「失敗という学び」を得てほしいとアドバイスしました。

また、「子どもの教育は、学校だけでも家庭だけでもできない。社会全体・地域で子どもを育てていかなくてはならない」と強調。「地域に大事にされて育った子どもは、そのまが大好きになり、将来的にはまちに戻ってきてくれる」と持論を述べました。



▲ 福大生が祭りの受付でアンケートを配布



▲ 心平の遺影の前で披露された高田島獅子舞

川内村天山祭りに福大生協力

川内村とのゆかりが深く、「カエルの詩人」として知られる草野心平(1903～88年)をしのぶ「天山祭り」が7月12日、村村民体育センターで開催されました。本サテライト長の藤室玲治特任准教授が指導教員の協働プロジェクト学修「川内村の歴史と魅力を伝える」の履修生4人も運営に携わりました。

履修生は来場者アンケートの作成や実施、会場設営などを担当。訪れた一人一人に村の魅力発信の方法など20項目を尋ねるアンケート用紙を配布し、回答してもらいました。

祭りは心平の蔵書を収める「天山文庫」が落成した1966年に始まり、今年は第60回の節目。心平が愛好してやまなかったものの、コロナ禍で中断していたお酒や食事が提供され、記念に心平の似顔絵が入った升も配られました。

心平の遺影の前では、村立川内小中学園6、7年生の自作詩や、詩誌『歷程』同人による心平作「わが抒情詩」の朗読に続き、郷土芸能の高田島獅子舞などが披露され、川内甚句の踊りで締めくくりました。

お知らせ「福島復興とコミュニティ再生」テーマにシンポジウムを開催します

地域未来デザインセンターでは、福島の復興に向けて今後必要な取り組みを考えるために、復興創生シンポジウム「福島復興とコミュニティ再生の展望―第3期復興・創生期間に向けて」を開催します。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

- 日時: 2025年12月13日(土) 13時30分～17時00分
- 会場: Jヴィレッジ コンベンションホール (双葉郡楢葉町山田岡美シ森8) + オンライン
- 内容: 復興庁福島復興局 志田 文毅局長による基調講演他
- 申込: QRコードから
- その他詳細: センターHPから

申し込み



「相双の風」43号

読者アンケートにご協力ください



「相双の風」は、被災地域の今と、福島大学地域未来デザインセンター相双地域支援サテライトの取り組みを紹介するニュースレターです。相双地域支援サテライトは被災地と福島大学をつなぐ現地拠点として、被災地域復興に向けた支援活動を行っています。



TOPICS トピックス

地元音頭に合わせ葛尾村盆踊り 避難指示解除後、8回目

やぐらの周りに広がる踊りの輪

葛尾村の復興交流館あぜりあで8月14日、恒例の盆踊りが行われました。村内外から延べ400人が参加、地元の「かつらお音頭」に合わせて踊りの輪が広がりました。原発事故以前は行政区ごとの開催でしたが、帰還困難区域を除く村の避難指示が解除された2016年から、落合・葛尾・上野川の3地区が連携して村全体で行うように。その後、コロナ禍による中断もあり、今年で8回目です。

実行委員長猪狩智裕さん(35)は「昨年は雨でしたが、今年は天気が持って良かった。先祖供養の意味もあり、帰省の人や避難している人が戻って再会する様子を見るとうれしい」と喜び、「村外から関わってくれる人も増え、変化しながら伝統を継いでいきたい」と意気込みます。16年から盆踊りを手伝う日本大学工学部の学生団体RISM(リズム、地域連携活動研究会)は、今回20人が参加。代表の稲垣聡さん(20)は「地域の方との一体感が感じられる。今後も団体として地域おこしの手伝いを続けたい」と語っていました。



▲「変化しながら盆踊りの伝統を継いでいく」と話す実行委員長の猪狩智裕さん

中山間地域 伝統と創造の出会い

2011年の東電福島第一原発事故では、原発が立地する沿岸部だけでなく、広範囲に放射線が拡散した中山間地域も複数の自治体で全住民の避難を強いられました。震災前から過疎化に悩んでいた同地域の祭りや伝統芸能は、原発事故の影響でさらに存続の危機にさらされています。一方、逆境をばねに、各地で帰還住民と移住者が力を合わせて新たな伝統を生み出そうという動きも見られます。いずれも全村避難を経験した飯舘村、川内村、葛尾村で話題を拾いました。



相双地域支援サテライト
キャラクター そうそうくん

飯舘村 | 新たなる例大祭へ準備着々

山津見神社 原発事故と火災乗り越え

オオカミ信仰で知られる飯舘村佐須の山津見神社で、原発事故や火災を乗り越え、新たな形で例大祭を復活させようという動きが新旧住民らの間で盛り上がっています。今年12月の本番に向けて、オオカミにまつわる神社創建の由緒にちなんだ舞台や、参拝者をもてなす「かやぶき茶屋」の準備が進みます。

同神社は全国に所在する山津見神社の総本社。拝殿の約250枚のオオカミの天井絵で有名です。オオカミ信仰を持つ人を中心に崇敬者は日本全国にいて、震災前は住民らが設営したかやぶきの茶屋で手作りの食事や土産を用意、3日間で2～3万人の参拝客をもてなしていました。

福島第一原発事故によって飯舘村は全村避難となり、さらに避難中の2013年4月の社殿の火災で天井絵や参拝客の名簿が焼失。15年に社殿は再建を果たし、東京藝術大学の協力により天井絵も修復されましたが、例大祭は規模の縮小を余儀なくされ、1日だけとなりました。



▲ 山津見神社の境内に立つ矢野淳さん



▲ 虎捕太鼓の練習に余念がない住民と福大生ら

住民らが理想として思い描くのは、震災前の活気ある佐須の祭り。「参拝に来てくれる人に茶屋で温かい料理を出したい」「うどん、そばは欠かせない。俺らのプライドだ」と古くからの住民らは熱く語ります。同神社の久米啓介宮司は「佐須に活気が戻ってくるのはうれしい。地域の文化を若い人も交えて継承していつてもらいたい」と見守っています。

山津見神社例大祭は、旧暦10月15～17日に当たる12月4～6日の3日間開催。住民らが手作りする広さ50平方メートルほどのかやぶき茶屋や矢野さん演出の虎捕伝説ステージは連日開かれ、2日目と最終日には、福島大生が継承に取り組む佐須の伝統芸能「虎捕太鼓」を住民らと共に奉納する予定です。

12月、「虎捕伝説」の舞台も

新旧住民と共に例大祭の盛り上げを図るのは、村内で交流拠点「図図倉庫」（ズットソーコ）を運営する矢野淳さん。震災当時高校生だった矢野さんは、震災後に飯舘村の復興支援でNPO法人「ふくしま再生の会」を立ち上げた父・田尾陽一さんの影響を受け、大学卒業後に飯舘村へ移住。矢野さんは例大祭で、平安中期に白いオオカミの導きにより武将が凶賊「橘墨虎」を討伐したという同神社の「虎捕（とらとり）伝説」のステージを演出することになっていて、「高齢者の知恵や思いを若者が支え、来年以降にもつなげていきたい」と話します。

川内村

「川内文藝マルシェ」運営 志賀風夏さんに聞く

被災地の伝統どう生かす？ 生み出す努力と感謝忘れず

7月12日、川内村ゆかりの詩人草野心平をしのぶ第60回「天山祭り」の会場の一角で、詩歌などの文学書や地元産の野菜を売る初の「川内文藝マルシェ」が開催されました。これには近隣の町からも若者たちが出店し、原発事故後も途切れることなく続いた歴史ある祭りに、新しい風を吹き込みました。被災地の伝統をどう生かすべきなのか。中心になってマルシェを運営したカフェ「秋風舎」店主の志賀風夏さんに聞きました。



▲ 「伝統継承に外部の刺激も必要」と語る志賀風夏さん

—古くからの伝統に移住者や若者が新しい形を与え、より豊かにするためには、どうすればよいと思いますか。

「私は、昔のものはできる限り残すべきという考えです。川内村は再開発や合併をしなかった故に今の環境が守られ、それを好ましく思う人たちが集まって来るので、村を残してくれた先人へ深い感謝の念を持っています」

「マルシェをやろうと決めてからは、地元の人たちの意見を伺って、新しい人を祭りに呼び込むためだと、時間をかけて丁寧に説明することで理解を得ました。手順を間違えると反発と対立を招きます。新しいものを生み出す努力と共に、伝統へのリスペクトは欠かせません」

—留意したことは。

「伝統行事の魅力を村外の人に伝える工夫ですね。『天山祭りは心平さんを慕う人たちが集まって、詩を朗読したり、（コロナ禍以前は）お酒を酌み交わしたりする行事。普通の夏祭りとはちょっと違うけれど、昔からの形が残っています』といった説明に、面白さを感じてくれる人もいます」

—伝統芸能を次世代に伝えるために何が大切ですか。

「村には県重要無形民俗文化財に指定されている獅子舞（西山、西郷、町、高田島）や、神楽（高田島、東郷）、浦安の舞などの伝統芸能があります。地元の子どもたちは、やらされていると不満を感じることもあります。他の地域で誇りを持って舞などの継承をしている人たちの動画を見せると、嫌々やっていたものの価値に気づき、取り組み方が変わります。時には外からの刺激も必要です」



▲ 文芸書や野菜、食品などを販売した川内文藝マルシェ

葛尾村

伝統芸能に現代美術の息吹

野行地区の宝財踊り 華やかな舞姿、アート作品に

原発事故による帰還困難区域の葛尾村野行（のゆき）地区の伝統芸能で、10人の踊り手がそれぞれ異なる衣装を着けて華やかに練る「宝財（ほうさい）踊り」。震災の影響などで途絶えつつあるこの芸能に現代美術の命を吹き込んだのが、主に都内で活動するアーティストの鮫島弓起雄（さめしま・ゆみきお）さんです。自身が踊る姿を刷り込んだ10体のアクリルスタンド（高さ約20センチ）の作品が、村復興交流館あぜりあに展示され、来訪者の目を引いています。



▲ あぜりあに展示された宝財踊りのアクリルスタンド

宝財踊りは南北朝時代に現在の伊達市にあった霊山城が攻め落とされた際、家臣らが旅芸人に扮して敗走した故事が起源とされ、野行地区には大正時代、隣接する浪江町から大衆的な娯楽として伝わったといいます。

鮫島さんは村の移住・定住促進事業の一環であるKatsurao AIRというアートプロジェクトに参加し、2024年6～7月、村に滞在。困難に直面しながらも踊りを伝えようとする村民の熱意に心を動かされ、アートの役割の一つであるアーカイブ（保存記録）の手法で作品を仕上げました。現地のQRコードをスマートフォンで読み込むと、拡張現実（AR）の作品をどこでも見ることができます。



福島大学公式
マスコットキャラクター
めばえちゃん